

BENNETT 彗星 (1969 i) について

昨 1969 年末の 12 月 28 日 (U.T.) 南阿ブレトリア天文台の Mr. J.C. Bennett によって発見されたこの彗星は赤緯が低く、北半球での観測が不可能であったが、南半球での観測の結果から Dr. B.G. Marsden による次のような要素と位置、光度の予報が発表された。

なお、この彗星は 3 月 12 日に南緯 10 度、東経 123 度を航行中の日本郵船の船上から観望されたのを始め、15 日、17 日、20 日と航行中の船舶や、飛行中の定期航空機上からの観測が報告されている。その内 20 日の報告はメキシコ湾を航行中の大阪商船三井船舶の“べるげん丸”からの報告であって、中天に大きく竹箒の尾を引いた彗星が肉眼で見えたそうである。

要素

$$\left. \begin{array}{l} T=1970 \text{ III } 20.0394\text{E} \quad \omega=354.1647 \\ e=0.996000 \quad \Omega=223.9486 \\ q=0.537496 \text{ AU} \quad i=90.0323 \end{array} \right\} 1950.0$$

予報

1970 ET 0 ^h	α (1950.0)	δ	A	r	mag.
IV— 4	22 ^h 30.2	+27°02'	0.760	0.639	2.5
	9	22 49.3	+37 43		
	14	23 11.2	+45 38	0.960	0.778 3.8
	19	23 34.7	+51 24		
	24	23 58.9	+55 38	1.199	0.938 5.1
	29	0 23.0	+58 46		
V— 4	0 46.4	+61 08	1.437	1.102	6.2

(香西洋樹)

新刊紹介

不識石語 辻光之助著 大法輪閣・昭和 44 年刊,
(pp. 260, 1500 円)

「大法輪」という仏教の総合雑誌に、辻さんはよく愛犬クマ公に因んだ法話を寄せておられたことがある。昭和 43 年の正月号からこの雑誌に「不識石語」と題する連載が始まり、本屋で立読をしたり、また雑誌をいただいたり、毎号愉しく拝見した。辻さんは東京天文台を卒業してから、草加の独協大学に御勤務になっているが、その地の利を得て、重いカメラ・三脚を肩にして、関東一円の石仏を撮影しておられたのである。その石仏の多くは古寺の一隅におかれた墓標であり、そして辻さんは半跏思惟の如意輪の姿を好まれたようである。毎号 4~5 枚の写真にそれぞれ出離・憐愍・變遷・無礙などとむずかしい題名がつき、禅語・唐詩・先師の歌がかかげられ、そして適確な辻談議がこれをパラフレーズする。たとえば「忘却」の章では「十年帰るを得ずんば、忘却す来時の道」の詩がつき、ラジオのドラマの「君の名は」の名文句が引用され「ちかづきて あおぎみれども みほとけのみそなはずとも あらぬさびしさ」と秋草道人の歌で終わっている。

天文学と石仏といったどんな関係があるのかという

質問が出てくるが、この本は辻さんの早稲田中学時代の恩師会津八一・山口剛の両先生に捧げられている。秋草道人会津八一博士は「南京新唱」の歌集をもって、奈良の諸仏諸伽藍の美を、すでに大正 13 年に世に問うておられる。また道人は若くして星座の趣味をもち、自ら獅子座の人と称し、青年時代には信州の山奥で提灯片手に星図を眺めていた所を狸の化けたのと間違えられて村人に袋叩きになったという逸話もあるほどで、天文と仏像との結びつきは、あるいは辻さんの少年時代に道人を通して強くふきこまれたのであろうか。

仄聞する所によれば、辻さんは還暦の祝いに雲水の墨染の僧衣を所望されたというのが、人生無常の悟りは星辰界の彼方にあったのであろうか、あるいは此方だったのであろうか、一度おききたいと思っている。この書の題名は序文の山田無文師も書かれているように「識らざる石を語る」のか、「識らずして石は語る」とよむのか「石の語るを識らず」と解すのか、これは読者の自由に委ねられるが、御自身撮影・現像・引伸をされた印画はハイ・キイのまことに悠遠な出来栄で、評者のごとき無教養の者は写真集としてありがたく拝見している。若杉慧氏の序言をはじめ、山田無文・安藤更生・和達清夫と名だたる旧友の跋文にかこまれて、辻さんのおだやかな慈眼が目に見えようである。

(石田五郎)

訂正

3 月号月報アルバムの 56, 57 ページは、印刷上の不注意のため入れ換っていました。(大道藤川彗星を含むページが左に来る)訂正するとともに、お詫び致します。